

# 中山間地域における農家と企業の連携による生薬の里づくり

～高知県越知町株式会社ヒューマンライフ土佐を例に～

1130499 宮崎 ゆうき  
高知工科大学マネジメント学部

## 1、概要

都市部と地方の経済的格差や少子高齢化の進む現代の日本において、中山間地域での活力・維持向上は、全国の地域における重要な課題である。高知県の山間部に位置する越知町で「生薬の里づくり」を進めている(株)ヒューマンライフ土佐は、漢方薬品メーカー「ツムラ」と締結し、ミシマサイコという生薬の育成を中心に漢方事業を行っている。最高売り上げ5億円をあげている。

## 2、背景

現在日本は多くの問題を抱えている。例えば、都市部と地域に住む人々の経済や情報格差、過疎・高齢化の進行による集落機能の低下、農地や山林の保安全管理機能の低下、医療費の増大、介護問題等である。このような問題は全国各地で発生しており、特に山間部に住む人々に大きな影響を与えている。地域の活力の低下が山間部で住む人々を経済的に苦しめている。

## 3、目的

本調査研究で取り上げる高知県越知町の農事組合法人(株)ヒューマンライフ土佐、ツムラや契約農家が主体となって取り組む「生薬の里づくり」は、地域ビジネスによる地域活性化の成功事例として全国的に有名である。これに関する成功要因を具体的に抽出し、生み出された地域の価値を検証する。また、現在に至るプロセスおよび現状と課題について詳細に述べる。少子高齢化や過疎化に悩む他地域の活性化につながるような要因を抽出することが本稿の目的である。

## 4、研究方法

本稿では、まず、全国の地域における現状と課題について文献や各種資料、データに基づいてまとめ分析をする。次に、(株)ヒューマンライフ土佐の創設者である片岡継雄さんへ聞

き取り調査や、事業の創出から現在にいたるプロセスについて述べる。これらから得られた知見により、ヒューマンライフ土佐に関する事業の成功要因を具体的に抽出し、生み出された地域の価値を検証する。また、このヒューマンライフ土佐の事業が及ぼす地域への波及効果について述べ、今後展開される「生薬の里づくり構想」について考察する。最後に、これまでの調査研究に隣接する領域のマネジメント理論と対比させながら、地域活性化に資する地域ビジネスの在り方を検討し、自らの考察を述べたいと考えている。

## 5、結果

### ◎ヒューマンライフ土佐の成功要因・特徴

最も大きな成功要因の一つとしては、社会構造の変化に伴う人口構造の変化を予想し、今後需要が見込まれる商品の原材料を生産したことだと考える。高齢化社会において、薬の需要は急速に右肩上がり伸び続けている。国内の栽培地を求めていたツムラのニーズと、生薬栽培の特産化による農業進行を図ろうとしていた農家とのニーズが出会ったことにより、事業が成功したと考える。

その他にも様々な成功要因が取り上げられる。大きく3つに分けて説明する。

1. 高知県越知町の特徴は、仁淀川の清流②標高100～1000m③多様な生物が生息・生育④気候・風土が適しているなどの地域特性がある。多様な自然条件を活かして古くから生姜など、数多くの生薬が栽培されてきた。越知町は生薬が育成しやすい環境で、漢方にふさわしい町なのである。

2. 「協働の森づくり」事業の取り組みである。これは生薬の持続可能な栽培に向けて、栽培地上流の水源地とする森林の健全化を図るために、2008年6月にヒューマンライフ土佐、ツムラ、越知町、高知県の4者が、高知県施策に基づく「パートナーズ協定」を締結した事業である。主な事業内容は、ツムラの社員等の研修や交流、継続的な森林整備作業である。

この取り組みが進歩することによって森林の荒廃が改善され、森林の公益的機能(災害抑制機能、保全休養機能など)の発揮や生薬栽培地の拡大が期待される。現在では地元中学生の森林作業体験を受け入れており、環境教育として活用されている。

3. 「教育加算制度」を実施したことである。これは減少する契約面積の中で、組合員にどう割り当てるかが問題であったが、若い組合員には子供の人数に比例して栽培面積の割り当てを増やし、且つ、助成金を提供している。創設者片岡さんの人情味ある人柄やリーダーシップが、契約農家のやりがいや生き甲斐に繋がっている。そして、ツムラと生薬の契約栽培を行うことにより、収入安定化及び向上に図られている。

## 6、対策と提案

越知町でも問題となっている若者の都会流出に関する対策方法について検討した。

まず、若者の都会流出を防止するためには、若者に地域の魅力を知ってもらうことが重要だと考える。そのためには県や町、企業の協力が必要となってくる。その解決方法を①～③にわけて提案する。

- ① インターンシップや交流活動を通じて、農業のことを知ってもらう。
- ② 農業従事者を学校の講義に招き、農業に関する授業を行い、学生に関心をもってもらう。
- ③ 実際に働いている人たちの生の声を聴く。

現在全国的に就職難と言われており、地域にいる若者は「地域に雇用がない」「若いうちから農業の仕事はやりたくない」と思いがちな部分がある。それとは逆に農業従事者は、「後継者がいない」「若手の農業者がいない」という問題を抱えている。現在の越知町の人口は 6329 人だが、2035 年の人口推移は 4200 人と予想されており、大変低い水準となっている。

これら①～③の対策を行う上で、若者が持つ農業のネガティブイメージを払しょくし、農業の良さを一人でも多くの若者に伝えていくことが重要である。ヒューマンライフ土佐も生薬栽培を通じて若者に企業の良さや地域の魅力を発信し、課題としている「担い手づくり」を積極的に取り組んでいく必要がある。

## 7、今後の課題

現在、健康志向の方が増え、漢方薬は右肩上がりに伸びている。今までは中国からの輸入を頼りにしていたが、全国的に漢方需要が伸び、日本への漢方輸入が困難となってきている。このため日本は、国内生産から販売までの過程を自国でこなしていかなければならない。私はこれを絶望ではなく「チャンス」と考える。生薬は自然条件を満たしていないと栽培することが難しい。しかし、日本には越知町だけではなく他にもたくさんの地域が自然に満ち溢れている。他地域を活用することにより、地域の活力の向上と雇用創出を生み出すことができ、現在課題とされている地域活力の低下、若者の都会流出や過疎化の問題解決策に繋がる。周辺地域への水平展開、市場がもともとめているあるいは将来求めてくるであろう商品の原材料を生産することが大切だと考える。今後さらに産官学が連携しながら地域の方々のやれる仕事を作ることが重要であり、地域住民が充実した毎日を過ごせるような仕組みづくりが必要である。

### 【参考文献】

『pen+～漢方とは何か?～』株式会社阪急コミュニケーションズ, 2011年

『ふるさと中山間地域の活性化をめざして』総務庁行政監察局, 1997年

### 【謝辞】

本研究に関して、(株)ヒューマンライフ土佐の片岡継夫社長には、現地調査、ご講義、インタビュー等に協力頂きました。記して感謝の意を表します。